

國學院大學學術情報リポジトリ

On Terms of Address in Daudet's Last Class

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sakuma, Shunsuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000439

ドーデ『最後の授業』における人称詞

佐久間俊輔

一、はじめに

近代語の人称研究は代名詞を中心に行われてきたが、名詞も含めて考察する必要を説いた永田(二〇一五)の研究を受けて、本稿では、教室の場における人称詞使用について、一つの翻訳小説を取り上げ、明治から昭和にかけての使用実態を報告する。資料とした『最後の授業』(一八七二)は、アルフォンス・ドーデ(一八四〇—一八九七)の短編小説集『月曜物語』(一八七三年刊)の中の一編である。日本では明治時代に翻訳されて以来

広く読まれてきた。

普仏戦争に敗れ、フランスからプロイセンに割譲されたアルザスに住む少年フランツは、ある朝遅刻して学校に着くと、いつもは厳しいフランス語教師のアメル先生がやさしく迎えてくれる。そして、「今日はフランス語の最後の授業です。明日からドイツ語の先生が来ます。」と言う。そのあと、フランス語は世界中で一番美しい言葉であるなどと述べた後、最後に「フランスばんざい！」と黒板に大きな字を書いて授業が終わりになる、という物語である。

二、調査対象

国語愛の観点から『最後の授業』が国語教科書の教材として扱われ、そして姿を消した経緯は府川（一九九二）に詳しい。本稿では府川作成の翻訳年表中、昭和二十六年までの資料に新たに見いだしたものを加えた二十七資料について、次の七点を調査した。

物語の展開に沿って、自称詞としてA（フランス）——語りにおける地の文——、F（アメル先生）、教師から生徒への呼称詞としてB（フランス）、D（生徒全体）、また対称詞としてC（フランス）、E（生徒全体）、さらに、Gプロイセンの兵士からアルザスの人への対称詞（アメル先生の話の中で引用される形で）について見ることにする。ただし、BとFはアメル先生から生徒への会話表現なのに対し、Aは小説における一人称の語り、Gは引用の中での表現であり、性格が異なるので、AとGは参考として別に考察することにする。

次の、AからGの小見出しに続く具体例は、最初の翻訳である「をさな心」（瓶夢生・紅葉山人訳 明治三十五年三月）による。引用は新字旧仮名遣いとし、ルビは適宜施す。

A 自称詞

其朝は学校へ行くのが大変遅れましたから、屹度きつとしか譲ゆるらるらるに違ちが無ないと思つて、A僕は実に怖おそかつたのです。

B 呼称詞・C 対称詞

B1フランスさん、C1貴方あなたが見えなかつたけれど授業を始めました。早く席にお着きなさい

然し、B2フランスさん、C2貴方あなたばかりを悪いとは言ひませぬ。
（アメル先生↓生徒…フランス）
（アメル先生↓生徒…フランス）

B1は授業が既に始まっていることを告げる場面、B2は問いに答えられない生徒を論ず場面での呼称詞の例である。

D 呼称詞・E 対称詞・F 自称詞

D皆さん、F私が恠いかしてE皆さんに教授を致しますのも、今日限こんにち限りであります。
（アメル先生↓生徒全体）

G プロイセンの兵士がアルザスの人に対し

敵国の人間から「なんだと？ G貴様は自分で仏蘭西人だといつてるが、そのくせ自分の国の言葉を読めも書けもないぢやないか！」といはれたつて、仕方のないことになつてしまつた。「をさな心」にはこの箇所このところの訳がないので、2天弦「最終のお稽古」から引用した

三、自称詞

アメル先生の自称詞Fについて見る。多くが「私」、「わたし」を使用する中で、4菊池（大正四年）は「俺」を用いている。四十年間教えてきたアメル先生は老人であり、かつ教師という地位を表す語として使用したと考えられる。

ところで、興味深いのは、今日でも議論がある自称詞「先生」が戦前から用いられていることである。17斎田（昭和十二年）、25田島（昭和二十四年）、27桜井（昭和二十六年）が「先生」を用いている。斎田の訳文は、題名が「最後の授業（朗読対話）」、書名が「非常時日本の学芸会資料」とあることからわかるように、学芸会用に対話形式に書き換えられている。

アンメル先生 フランツさん。先生は今日は叱ることを
よしませう。（17斎田）

教師が、自身を「先生」と称する例は、大正時代には既に見られるようである。

教「今度ハ先生ノ発音ガ正シイカ正シクナイカ、ヨク気ヲ
付ケテオキキナサイ。……」

（『満鉄沿線に於ける日本語教授法の変遷』昭和八年刊所

収「鹿子生儀三郎氏の日本語教授法」⁽³⁾（大正九年満鉄学務課より転載）

昭和になると、「お待ち、先生が又お父さんに謝つてあげる。」（池田宣政『小山羊の唄』昭和三年）などと使われている。

四、呼称詞と対称詞との相関

アメル先生が生徒全体に対して用いている呼称詞Dは、2天絃（明治三十七年）と4菊池（大正四年）の「こどもたち」以外は「みなさん」である。

アメル先生からフランツへの呼称詞Bは、「I名前の呼び捨て」、「II名前+敬称」に大別できる（【附表】参照）。Iが14例、IIが8例で、呼び捨ての例が多い。

(一) 呼称詞・呼び捨て

呼称詞B1「フランツ」を使用しているグループは、さらに、フランツへの対称詞（項目C）に①「お前」を用いる（25）か、②「君」を用いる（16〜27）かで二分できる。

(二) 呼称詞・名前十敬称(君)

このグループ③は、対称詞(項目C)では「君」を用いている。「名前+君」の言い方は昭和になって見られる。

さあ、早く席におつきなさい。フランツ君よ。私達は、君
 なしで、授業を始めるところでした。(14頁島)

国定教科書でも同様に昭和になって見られる。

スルト、先生 ガ ニコニコ シテ、

「太郎君、エライゾ。コロンデ モ、ヨク シマヒ マ
 デ 走ツタ。カンシン、カンシン。」ト イツテ、ホメテ
 下サイマシタ。

(「四カケツコ」 国定教科書第四期 昭和八年)

(三) 呼称詞・名前十敬称(さん)

「さん」を附して呼ぶグループ④では対称詞C1に「あなた」を用い、生徒への対称詞Eは「みなさん」を使っている。⁴⁾

15片山(昭和九年)は「フランツ」を「フリッツ」とする。

『最後の授業』は仏語版と、その重訳である英語版があるが、
 ともに表記は「Frantz」である。しかし、『仏語捷徑』(厚母

清一著、宝文館、昭和二年刊)に収録された「最後の授業」では「mon petit Fritz」とあり、片山はこれを底本に訳したもので

ある。⁵⁾

このグループでは、C2に「お前」の使用が目につくが、こ
 こは指名されたフランツが答えられないために説論している場
 面で、目下への使用例である。⁶⁾

(四) 使用年代

グループ①は明治から戦前にかけての使用が主である。それ
 に対し、②では、戦前に用例はあるものの、戦後になってから
 の使用例が多い。③は戦前、戦後に見られるが、用例が少ない
 ので傾向を示すことは難しい。④は明治から戦前にかけての使
 用されており、①と似た傾向が見られる。

(五) 一 その他①

「I名前の呼び捨て」で「フランク」を用いているものが二
 例ある。いずれも対称詞C1の記述を欠いている。5 藤浪を引
 用する。

「フランク、早く席にお着、今授業を始める所だ」といった。
 (5 藤浪)

22 木村(昭和二十三年)は、英語版を訳したもので、「中学
 初級」という英語学習雑誌に掲載されている。5 藤浪(大正六

年)は何を底本にしたのかは不明であるが、英語風の表現に改めたものと考ええる。

日本人作家による、外国の教師が生徒を呼び捨てにする例として次のようなものがあげられる。

「ジム、あなたはいい子、よく私の言つたことがわかつてくれましたね。「中略」と先生はにこにこしながら僕達を向い合せました。

(有島武郎『二房の葡萄』大正九年 外国の女性教師)
「また悪戯をしたね、ジャック。お待ち、先生が又お父さんに謝つてあげる。」

(池田宣政『小山羊の唄』昭和三年 北フランス小学校教師オーギュスト)

(五)・二 その他②

4 菊池(大正四年)が用いている「フランツ坊」は、原文を意訳した訳語である。対称詞Cには「お前」、Eには「お前たち」を使用している。

お、俺のフランツ坊か、早く席へ著くが善い。お前が来なくても今始めるところだつた。
フランツ坊や、俺は今日はお前を罰しはせぬ。(4 菊池)

なお、菊池の訳文は大正六年の6『帝国読本』(芳賀矢一編)や大正十年の8『新制中等新国文』(三矢重松他編)、大正十二年の9『現代国語読本』(八波則吉編)などの国語教科書に採録されたが、それらにはB1の「お、俺のフランツ坊か」の箇所はない。さらに、8『新制中等新国文』では、「フランツや」と「坊」のない呼び捨ての形で掲載している。⁽⁸⁾

五、アメル先生の話体

ここでは、C1・C2・Eにおけるアメル先生の発話を、話体の観点から見ることにする。

(一) 常体専用

2 天絃(明治三十七年)、4 菊池(大正四年)、7 極東時報(大正七年)、11 八木(大正十五年)と明治から大正時代に集中している。Eでの例を示す。

私たちが皆を教へてあげるのも、うこれ限りになつた。
これがお前達に俺の教へる最後の授業だ、
今日が授業をする最後の日である、
(2 天絃)
(4 菊池)
(7 極東時報)

私がお前達のためにために授業をするのは之が最後だ。

(八木 11)

これらの作品は、地の文(フランツの語り)も常体であるが、11八木だけは敬体である。

(二) 敬体専用

1 瓶夢生・紅葉山人(明治三十五年)、17 斎田(昭和十二年)、20 平原社編輯部(昭和十七年)、と、明治から戦前にかけて見られる。次のように、C2の説論の場面でも敬体を用いている。

然し、フランツさん、貴方ばかりを悪いとは言ひません。

(1 瓶夢生・紅葉山人)

フランツさん、先生は今日は叱ることをよしませう。

(17 斎田)

フランツさん、私はあなたを叱りはいたしません。

(20 平原社編輯部)

(三) 常体と敬体との混用

「常体優位」、「敬体優位 a」、「敬体優位 b」の三パターンに分類できる。

一 常体優位(常体・敬体)

10 鈴木(大正十三年)、18 永井(昭和十四年)、22 木村(昭和二十三年)、23 田沼(昭和二十四年)、26 阿部(昭和二十五年)はフランツへは常体を用い、生徒全体へは敬体を用いている。10 鈴木の例を示す。

C 1 フランツ、おまへが来るのを待つてたんだよ。

C 2 私(わたし)はもうおまへをおこりはしないよ。

E 私(わたし)がみなさんを教へるのは今日限りです。

二 敬体優位

敬体優位はさらに次の二つのグループに分けられる。

a 敬体・常体・敬体

C 2 すなわちフランツを論ず場面のみが常体である。3 後藤(大正三年)、12 藤森(昭和二年)、14 貝島(昭和五年)、15 片山(昭和九年)の、大正から戦前にかけての四作品で用いられている。

b 常体・敬体・敬体

席に着くように促す箇所のみ常体で、フランツを論ず場面と生徒全体に話す場面では敬体を用いている。5 藤浪(大正六年)、13 小野(昭和四年)、16 桜田(昭和十一年)、21 萩原(昭和二十三年)、24 浅見(昭和二十四年)、25 田島(昭和二十四年)、

27 桜井（昭和二十六年）である。

これらを四節での記述と組み合わせてみる。B1で呼び捨てを用い、C1に「お前」を用いるグループ①では常体専用・常体優位が多い。次に、B1で呼び捨てを用い、C1に「君」を用いるグループ②では常体優位と敬体優位bが拮抗している。ただ、これらはC2が常体か敬体かの違いであり、C1とEはそれぞれ常体・敬体で共通している。

「名前+君」のグループ③は、敬体優位aと敬体優位bが各一例である。

「名前+さん」のグループ④は、敬体と敬体優位aとが各三例と同数である。

以上の説明をまとめると次のようになる。

- グループ… B1 … C1 … 〈先生の話体〉
- ① … 呼び捨て … お前 … 常体専用・常体優位
 - ② … 呼び捨て … 君 … 常体優位・敬体優位b
 - ③ … 名前+君 … 君 … 敬体優位a・敬体優位b
 - ④ … 名前+さん…あなた…敬体専用・敬体優位a

六、語りにおける自称詞

『最後の授業』はフ란ツの目を通して描写される一人称小説である。本節では、会話での自称詞ではないが、語りの中で、少年が自分をどのように表現するか、参考として見ておく。

地の文における自称詞として「私」と「僕」が用いられている。「私」には振り仮名がないので「わたし」か「わたくし」か判断できない。

小学生の礼儀について、明治十六年に文部省から出された『礼法要項』の「第五章 言葉遣ひ」では、

- 二、自称は、通常『私』を用ひる。長上に対しては氏または名を用ひることがある。男子は同輩に対して『僕』を用ひてもよいが、長上に対しては用ひてはならない。
- 三、対称は、長上に対しては、身分に応じて相当の敬称を用ひる。

同輩に対しては、通常『あなた』を用ひ、男子は『君』を用ひてもよい。

とある。^⑩

一人称小説で「僕」を使用している早い例に若松賤子の『忘れ形見』（明治二十三年）がある。これはプロクターの「Sailor Boy」という長編詩の翻案小説である。

あなた僕の履歴を話せつて仰るの？ 話しますとも、直
つき話せつちまいますよ、だつて十四にしかならないん
すから、別段大した悦も苦勞もした事がないんですもの
を、ダガネ、モウ少し過ぎると僕は船乗になつて初めて航
海に行くんです、
(若松賤子『忘れ形見』)

飛田（一九九二）によれば、「僕」は「上↓下の関係から、書生同士の対等の関係に広まり、やがて下↓上の関係でも使われるようになったのである。」^⑪とのことである。『忘れ形見』で、十四歳の「僕」が聞き手の「あなた」の要請によつて自分の過去を語りだす状況は、下↓上の関係での使用と考えられる。

明治二十年の『尋常小学読本』には用いられていない「僕」が、明治三十七年から使用された第一期国定教科書『尋常小学読本』になると登場する、とも飛田（一九九二）は指摘している。学校での「僕」の使用の拡がり、翻訳・翻案で少年を主人公と

する一人称小説に「僕」を用いるようになったと考えられる。

なお、7極東時報（大正六年）では「自分」を用いている。掲載雑誌の性格から軍隊用語の影響とも考えられるところだが、小説の地の文に「自分」を用いることは、当時広く行われていることから、一般の用法と見ておく。

七、引用における対称詞

本節では、アメル先生の話の中で引用される兵士の言葉（項目G）について触れる。

項目Cでフランチへの対称詞に「お前」を用いるグループ①は、「お前（たち）」、「貴様（たち）」を用いている。なお、「お前」を使うのは、25田島（昭和二十四年）を除くと戦前までで、戦後は用いられなくなる。

一方、項目Cで対称詞「君」を用いるグループ②は、項目Gでも「君たち」を用いており、対称詞は「君」で統一的に用いている。

八、底本

ところで、テキスト(底本)の違いが訳語にどのように影響を与えているのであろうか。注(5)で触れたように仏語版でも相違があるが、英語に重訳されたものを日本語にした場合もあり、先行研究に山根(二〇一四)があるものの、全容は明らかになってはいない。

四節で述べた④のグループは、アメル先生が着ているコートの色を「青色」と訳している点でも共通である。仏語版が“verte”(緑色)なのに対し、英語訳では“green coat”、“blue coat”⁽¹³⁾二種の訳が存在する。それでは「青色」と訳している④のグループはすべて英語からの重訳かという点、20平原社編輯部(昭和十七年)「最後の授業」は『仏蘭西語文学講座』に対訳形式で収録されており、“verte”に「青い」と訳語を与えていて、「青色」と訳したグループが英語版を用いているとは言えない⁽¹⁴⁾。

また、アメル先生が手に持っていたものは、仏語版「Régie en fer」(英語版「Iron ruler」)(いずれも鉄製の定規)であるが、『新英語読本』(大正十年)には「cane」(鞭)とある。ところが、それ以前に発表された1冊夢生・紅葉山人(明治三十五年)、

2天絃(明治三十七年)、3後藤(大正三年)で、「鉄(の)鞭」と訳されていることから、『新英語読本』以前に「鞭」にあたる単語を用いたテキストが存在すると考えられる。

九、最後に

今回の調査で次のことが明らかになった。

1 自称詞「先生」は戦前から用いられている(他の資料からは大正時代にさかのぼれる)。

2 呼称詞と対称詞の関係で、

①呼称詞が呼び捨ての場合、対称詞は戦前まで「お前」を用いるが、戦後は「君」を使用ようになる。

②呼称詞が「名前+君」の場合、対称詞も「君」を用いる。「名前+君」の例は昭和になってから見られ、「名前+さん」の言い方が明治時代からあるのに比べ、新しい表現である。

③呼称詞が「名前+さん」の場合、対称詞は「あなた」を用いる(説論の場面では「お前」を使うこともある)。

3 呼称詞・対称詞と話体との関係は次の通りである。常体が優位な話体では呼称詞に呼び捨て、または「名前

「君」を用い、対称詞に「お前」または「君」を用いる傾向がある。一方、敬体が優位な話体では呼称詞に「名前＋さん」、または「名前＋君」を用い、対称詞に「あなた」または「君」を用いる傾向がある。「お前」・「君」と、「あなた」・「君」の使用は、説論の場面(C2)の話体に影響を受ける。

翻訳の資料は、先行の訳が影響を与えている可能性があり、その時代の言葉づかいの実態をどの程度反映しているかという資料性の問題が残る。さらに『最後の授業』は、底本が仏語と、英語からの重訳とがあり、底本の違いが翻訳に及ぼす影響について課題として残った。

教室の場における人称詞の実態を明らかにすることと合わせ、引き続き取り組んでいきたい。

(注)
(1) 永田(二〇一五)によれば、「印欧語族に基づいて作られた文法用語、『二人称代名詞』は日本語には不適當で、『山本、お前』と行くんだ」の場合、呼びかける『山本』は呼称詞、いったん呼びかけた後で使われる『お前』は対称詞と呼んで区別することにする。(一頁)とある。

- (2) 吉岡(二〇〇三) 122頁を参照。また、新聞でも次のように取り上げられている。「教師が自分を『先生はね』と呼ぶのは変ではないか、と疑問を投げかけた二日付『私もひとこと』欄の投稿に、反響の投稿が続々と届いている。教師や教師経験者からのものが目立つ。「教師の役割をはっきりさせることができる」と、「先生」の呼称を肯定的に受け止める意見もあるが、全体としては、「子どもと対等に向き合っていない表れ」「一般社会からずれている」と批判的な声が多い。教師同士の呼び方や、生徒をどう呼ぶかに広げて問題を提起する投書もあり、単なる呼称にとどまらず、教師と子どもとの関係のあり方にかかわる問題にも見える。」(朝日新聞一九九五年十月九日)
- (3) 別の箇所では「劉サン私ノ発音が正シイカ、正シクナイカ聴イテゴラシナサイ」と「私」を使用している。
- (4) 3後藤と12藤森を比較すると、両者の訳文はほぼ一致していることから、藤森の訳は後藤の訳を参考(下敷き)にしていると考えられる。
- (5) 「ゴエ」という表記のテキストは、『仏語教程』(陸軍中央幼年学校、大正五年刊)収録の『最後の授業』の方が早い。しかし『仏語教程』には、例えば、アメル先生が生徒たちに花壇への水まきを命じた旨の箇所が欠けている。『仏語捷徑』にはこの箇所があることから、片山は『仏語捷徑』を見て訳したと推測した。なお、『附表』で、B2の欄が「フリツ」とあるのは原文ママ。
- (6) 永田(二〇一五)は国定教科書を資料として、期を追うごとに「お前」の待遇価が低下していることを指摘している(156頁)。
- (7) 仏語版では「non petit Frantz」、英語版では「my little Frantz」とあり、どちらに基づくかは不明。なお、この箇所を7極東時報(大正八年)は「小さい(な) フランツ」、11八木(大正十五年)は「小さな(い) フランツ」と訳す。
- (8) 菊池6・8・9の国語教科書に掲載された文章は、菊池4を元にしてい

- るが、そのままではない。菊池4で「アメルさん」と語る場面に対応する五箇所全てが、教科書では「アメル先生」になっている。また、「僕は碌々書くことさへも出来ないんだ。」(菊池4)が、「僕は、まだろく／＼書くことさへも出来ないのだ。」(6・8・9)は、表記に違いはあるものの、同文)と、口語的な「んだ」ではなく「のだ」を用いている。さらに菊池6・8・9相互を比較すると、「腰掛に並んで」(6)が「席に着いて」(8)など文言に細かな差異が見られる。
- (9) 10鈴木は「フランスは」、13小野は「少年は」と三人称で訳している。鈴木三重吉は「少年少女諸君のために再話した」と述べており、また三人称に翻案された英語教科書を底本として用いているという指摘が山根(二〇一四)にある。
- (10) 『小學校作法教授要項』(文部省調査、宝文館、明治四十四年)には、一姓又八名ヲ呼ビ掛クルニハ「何さん」ト呼フヲ通例トス
一 自称ニハ「私」ト称シ対称ニハ「あなた」ト称スルヲ通例トスとある。
- (11) 飛田(一九九二)197頁、37〜39頁を参照。長崎(二〇〇七)では、二葉亭四迷『浮雲』で勇という少年が文三に「僕」を用いている例を、「少年が背伸びをして書生言葉を真似ている中で表れたもの」と解釈している。
- (12) 遠藤(一九八三)、木川(二〇一一)を参照。
- (13) 英語版では「George Burnham Ives」(一九〇三)、「The Harvard Classics Shelf of Fiction」(一九一七)、「Representative Modern Short Stories」(一九二七)では「blue coat」¹⁴「New century supplementary readers」(一九〇五)、「新英語読本」(一九二二)では「green coat」とある。
- (14) 四(三)で見たように15片山もフランス語からの訳と考えられるが、同様に「青色」と訳す。底本以外に先行訳を参照したことも考えられる。

また、④のグループ以外に「青色」と訳しているのは2天絃、4菊池(6、8、9)である。なお10鈴木、13小野、14貝島にはコート色の色の記述がない。

資料 訳者・掲載誌・発表年「最後の授業」以外の題・出版社

- 1 紙夢生・紅葉山人・新小説」・一九〇二(明治三十五年)・ささな心・紅葉全集別巻
- 2 天絃(片上伸)・「読売新聞」・一九〇四(明治三十七年)五月八日・最終のお稽古
- 3 後藤末雄・「普仏戦話」・一九一四(大正三年)・新潮文庫
- 4 菊池幽芳①・「幽芳集」・一九二五(大正四年)・至誠堂書店
- 5 藤浪水処・「東亜之光」(第12巻第7号)・一九一七(大正六年)
- 6 菊池幽芳②・「帝國読本 卷二 芳賀矢一編」・一九一七(大正六年)・富山房
- 7 極東時報・「極東時報」(42)・一九一七(大正六年)・最後の授業
- 8 菊池幽芳③・「新制中等新国文 巻二」・一九二一(大正十年)・文学社
- 9 菊池幽芳④・「現代国語読本」・一九二三(大正十二年)・東京開成館
- 10 鈴木三重吉・「赤い鳥」(第12巻第6号)・一九二四(大正十三年)・最後の授業
- 11 八木さわり・「月曜物語」(仏蘭西文学訳註叢書第四篇)・一九二六(大正十五年)・白水社
- 12 藤森淳三・「女性」・一九二七(昭和二年)九月号・童話最後の授業
- 13 小野誠悟・「少年世界愛国美談」・一九二九(昭和四年)・第一出版協会
- 14 貝島慶太郎・「空閑船」・一九三〇(昭和五年)・私家版
- 15 片山博通・「幽花亭隨筆」・一九三四(昭和九年)・檜謡曲書店
- 16 桜田佐①・「月曜物語」・一九三六(昭和十一年)・岩波文庫
- 17 斎田喬・「非常時日本の学芸会資料」・一九三七(昭和十二年)・弘学社

- 18 永井順・『川船物語』・一九三九(昭和十四年)・富山房百科文庫
 19 桜田佐②・『西洋文学選』・一九四〇(昭和十五年)・新潮社
 20 平原社編輯部・『仏蘭西語文学講座』・一九四二(昭和十七年)・最後の
 課業
 21 萩原弥彦・『ドーテ短編選』・一九四八(昭和二十三年)・丹頂書房
 22 木村武雄・『中学初級』昭和二十三年八月号・九月号・一九四八(昭和
 二十三年)・研究社
 23 田沼利男・『初旅・初うそ』・一九四九(昭和二十四年)・改造社
 24 浅見篤・『コルニーユちいさんの秘密』・一九四九(昭和二十四年)・晃
 文社
 25 田島清・『田島仏蘭西語講座巻3』・一九四九(昭和二十四年)・白水社
 26 阿部敬二・『少年スパイ』・一九五〇(昭和二十五年)・童話春秋社
 27 桜井成夫・『少年少女のための世界文学選3』・一九五二(昭和二十六年)・
 小峰書店

参考文献

- 遠藤(一九八三) 遠藤好英「自分」(講座日本語の語彙10) 明治書院
 木川(二〇一一) 木川行央「一人称代名詞としての『自分』」(言語科学
 研究17巻) 神田外語大学大学院紀要
 北村(一九七七) 北村季夫「IVどのように敬語を身につけさせたか—小
 学生の場合—」(国文学二一一二)
 小林(一九九八) 小林美恵子「学校の呼称—女性教師の呼称「クン」を
 中心に—」(日本語学) 第一七卷九号
 長崎(二〇〇七) 長崎靖子「人称代名詞『僕』『君』の変遷」(川村学園
 女子大学研究紀要) 第18巻第3号
 永田(二〇一五) 永田高志「対称詞体系の歴史的研究」和泉書院
 飛田(一九九二) 飛田良文『東京語成立史の研究』東京堂出版

- 府川(一九九二) 府川源一郎『消えた「最後の授業」言葉・国家・教育』
 大修館書店
 山根(二〇一四) 山根祥子「ドーテの短編小説の英語翻訳—最後の授業—
 —」(地球社会統合科学研究) 創刊号
 吉岡(二〇〇三) 吉岡泰夫「敬語の社会差・地域差と対人コミュニケーション
 ンの言語問題」(『朝倉日本語講座8敬語』朝倉書店)

【附表】

ケル 1 NO.	発表年	記者	A	F	B1	B2	C1	C2	D	E	G	C1	C2	E	分類
			自称詞 (フランク ッ)	自称詞 (アマル 先生)	呼称詞 (フ ランクッへ)	呼称詞 (フ ランクッへ)	対称詞 (フランク ッへ)	対称詞 (フランク ッへ)	呼称詞 (生徒へ)	対称詞 (生徒へ)	対称詞 (ア ロイゼン の人がア ルサスの 人を)				
5	1917	藤渕水処	私	私	フランク	フランク	-	あなた	みなさん	あなたたち	お前たち	常体	敬体	敬体	敬体優位b
22	1948	木村武雄	僕	私	フランク	フランク	-	君	みなさん	みなさん	お前たち	常体	常体	敬体	常体優位
2	1904	明治37年 天経(片上)	僕	わたし	フランク	フランク	お前	お前	こどもたち	みんな	貴様	常体	常体	常体	常体専用
7	1917	大正6年 樺東時報	自分	わたし	フランク	フランク	お前	お前	みなさん	-	お前達	常体	常体	常体	常体専用
10	1924	大正13年 鈴木三重吉	フランク	わたし	フランク	フランク	お前	お前	みなさん	みなさん	お前	常体	常体	敬体	常体優位
11	1926	大正15年 八木さわ子	私	私	フランク	フランク	お前	お前	みなさん	お前たち	お前たち	常体	常体	敬体	常体専用
13	1929	昭和4年 小野誠悟	少年	わたし	フランク	フランク	お前	お前	みんな	みんな	貴様たち	常体	敬体	敬体	敬体優位b
18	1939	昭和14年 永井順	僕	わたし	フランク	フランク	お前	お前	みなさん	-	お前たち	常体	常体	敬体	常体優位
25	1949	昭和24年 田島清	僕	先生	フランク	フランク	お前	お前	みなさん	みなさん	貴様たち	常体	敬体	敬体	敬体優位b
4	1915	大正4年 菊池幽芳①	僕	わたし	フランク坊	フランク坊	お前	お前	こどもたち	お前たち	貴様たち	常体	常体	常体	常体専用
16	1936	昭和11年 桜田佐①	(私)	私	フランク	フランク	君	君	みなさん	-	君たち	常体	敬体	敬体	敬体優位b
21	1948	昭和23年 藤原弥彦	(私)	私	フランク	フランク	君	-	みなさん	-	君たち	常体	敬体	敬体	敬体優位b
23	1949	昭和24年 田沼利男	僕	私	フランク	フランク	君	君	みなさん	-	君たち	常体	常体	敬体	常体優位
26	1950	昭和25年 阿部敬二	僕	わたし	フランク	フランク	君	君	みなさん	みなさん	君たち	常体	常体	敬体	常体優位
27	1951	昭和26年 桜井成夫	僕	先生	フランク	フランク	君	君	みなさん	-	君たち	常体	敬体	敬体	敬体優位b

ジャンル NO.	発表年	訳者	A 自称詞 (フランク ッ)	F 自称詞 (アマル 先生)	B1 呼称詞 (フ ランクッへ)	B2 呼称詞 (フ ランクッへ)	C1 対称詞 (フランク ッへ)	C2 対称詞 (フランク ッへ)	D 呼称詞 (生徒へ)	E 対称詞 (生徒へ)	G 対称詞 (フ ロイゼン の人がフ ルカムの 人々)	C1	C2	E	分類			
																敬体	常体	敬体
③	14	昭和5年	貝島慶太郎	(私)	私	フランクッ君	—	君	君	みなさん	みなさん	—	—	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体優位a
	24	昭和24年	浅見篤	(私)	私	フランクッ君	フランクッ君	君	君	みなさん	みなさん	君たち	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体優位b
	1	明治35年	眞學生・組業山人	僕	わたし	フランクッさん	フランクッさん	あなた	あなた	みなさん	みなさん	—	—	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体専用
	3	大正3年	後藤末雄	(私)	私	フランクッさん	フランクッさん	あなた	お前	みなさん	みなさん	お前	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体優位a
	12	昭和2年	藤森淳三	(私)	わたし	フランクッさん	フランクッさん	あなた	お前	みなさん	みなさん	お前たち	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体優位a
	17	昭和12年	斎田喬	僕	先生	フランクッさん	フランクッさん	—	—	みなさん	みなさん	お前	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体専用
④	20	昭和17年	平原社編輯部	僕	私	フランクッさん	フランクッさん	あなた	あなた	みなさん	みなさん	—	—	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体専用
	15	昭和9年	片山博通	(私)	私	フリックッさん	フリッ	—	お前	みなさん	あなたかた	—	—	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体優位a
	6	大正6年	菊池岬芳②	僕	わたし	—	フランクッ坊	—	お前	子どもたち	お前たち	お前たち	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体専用	
	8	大正10年	菊池岬芳③	僕	わたし	—	フランクッ	—	お前	子どもたち	お前たち	お前たち	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体専用	
	9	大正12年	菊池岬芳④	僕	わたし	—	フランクッ坊	—	お前	子どもたち	お前たち	お前たち	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体専用	
19	昭和15年	桜田佐②	(私)	私	フランクッ	フランクッ	君	君	みなさん	—	君たち	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体	敬体優位b	

II